「やれやれ。……『ライドウ』の名も、地に堕ちたものだ」
板張りの儀式の間に、闇の中から抜け出たかのように黒い毛皮を持つ一匹の猫が歩み出てた。
「夏月といったか。聞いての通り、今此の時よりお前の目付け役を任ぜられた業斗童子イの四十八番だ。一切の敬語は必要無い。『ゴウト』と呼び捨てにしてくれて構わんぞ」
可愛らしい外見とはかけ離れた、随分と偉そうな口振りで一方的に畳み掛けられ、儀式終了の達成感が不快感と摩り替わった。僅かに眉を寄せ、足下に歩み寄った黒猫を見詰める。
「――其の名で呼ぶな」
「……何」
僅かに眇められた目の色は、翠。――見慣れた、マグネタイトの色。
「俺は『ライドウ』だ」
「『ライドウ』、……はン。――お前がか、」
主張された内容を確認するように黒猫は口の中で少年の科白を転がした。
暫しの沈黙の後、がらんとした儀式の間に黒猫が喉の奥で笑う音が低く反響していく。
今度こそ感じた不快感を隠そうともせず、怒りを込めた眼差しで自分を睨みつけてくる少年に、其の翠の双眸の中に尚も失笑の光を宿したままの黒猫は、湧き出で続ける嗤いを堪え、口を開いた。
「これは愉快。たかがこれしきの試練をこなしただけで、栄えある『ライドウ』の名を名乗ることを許されたと思うたか」

「何だと、」
「――図に乗るな」
つい先程まで浮かべていた嘲笑を全てかき消し。黒猫は、顰められた少年の眼差しを真正面から受け止め、睨み返した。其の小さな獣の体から発せられた圧力に一瞬呑まれかけるが、少年は自身を叱咤し、体勢を持ち直した。
「何を勘違いしているのかは知らないが」
しかし黒猫はそんな少年の姿に一切構う事無く、無情に言葉を吐き続ける。
「お前は今、漸く『ライドウ』の名に相応しく在るよう振舞える手形を手にしただけに過ぎない。其れが名実共にお前のものとなるか否かは今後のお前次第であり、其の結果によっては、」
黒猫は少年の未来を見定めるかのようにすぅと目を眇めた。
「――俺がお前を『ライドウ』と呼んでやることは、只の一度も無いやも知れんな」
「……」
「お前が継いだのは『ライドウ』という名ばかりではない。其の名の影で知れず死んでいった名もなき者達の、そして其の名の下に全てを捧げた先代たち全ての『志』だ」
弱音を吐く程度なら見逃してやらんこともないが、若し僅かでも疎かにするようなことがあれば其の時は。
「……此の爪と牙の餌食になることと思え」
分かったな。

其の言葉が決して脅しではないことを示すように、黒猫は自らの白く光る爪と牙を剥き出しにした。
しかしそんな自らの態度にも怯む事無く無言で睨み据える少年の姿を目にした黒猫は、其処で漸く物騒な光を放ち続けていた自身の視線を面白いものを見るかのようなものに変化させた。
「精進しろよ、小僧。――だが俺にも情けはある。お前が厭だと言うのであれば、お前を其の名で呼ぶことはしないと約束しよう」
それでいいな。
僅か数度の遣り取りから完全に定められてしまった序列に面白くは無いものの、目の前の黒猫の口調から滲み出てくる経験の厚みに逆らうことは賢明ではない、と判断した少年は、学帽の鍔に手をかけ、無言で頷くに止めた。
一方、見るからに矜持の高そうな少年に自らの上位性を受け入れさせることに成功した黒猫は、満足そうに髭を揺らめかせ、背を向けた。其の場で微動だにしない少年に長い尾を振り、共の退出を促した。
逆らうでもなく、少年が後に付き従う気配を確認しながら控えの間に足を向ける。
「どうしても分からんことがあるようなら何でも訊け。形はこんなだが、其れなりに長生きはしているんでな。頼りにしてくれて構わんぞ」
先程とは打って変わって気安い口調で話し続ける黒猫の言葉を、黙って聞き続けるだけの少年の姿に何を思ったのか。黒猫は其の場で足を止め、振り返った。
……だが、これだけは言っておく。

廊下の端々に点された蝋燭の光が飲みこまれそうな程に色濃い暗闇の中、爛々と光る翠の双眸でひたと見据え、再び其の白い牙を覗かせながら黒猫は口を開いた。

「――俺に、縋るな」

数十米離れた所から、駆動機関の最終点検を行う九十九博士の声が周囲に響いている。

仲魔の一人を背後に従え、佇む黒猫の背を無言で見詰め続けていたら、こちらを振り向きもせずに何だ、と声をかけられた。普段と何ら変わることの無いその声色を聞いていると、彼がこれから向かうところが近所の煙草屋であるかのような気分になる。

――しかし、今から彼が行くところはそんな長閑な場所ではないのだ。

小さく頭を振り、現実から逃避するような思考に陥りかけた自身に確りしろと喝を入れた。

一向に返事を返さない自分に焦れたのか。気の短い黒猫は振り向き、てくてくと自分の前に歩み寄って足の直ぐ傍らに腰を据えた。

「何だと訊いている。全く、お前ときたら何時も其れだ。言いたいことがあるならさっさと言わんか。時刻が迫っているのは判っているだろう」

それとも時計すら読めないのか、此の田舎者め。

このような事態にあってさえ口の悪さを改める気の見受けられない己が目付けの言い草に、何時もの調子で莫迦にするなと咄嗟に反応しかけたが、寸前で思い留まった。

二、三度口を噤閉した後、ゆっくりと口を開く。
「ゴウト。……ゴウトは、」
「何だ」
「……いや、」
「何だ、はっきりしない奴だな」
強く促されても尚も口ごもる自分を見て、黒猫は舌打ちしつつも密やかに笑ったようだった。
「何だ、何を笑うことがある、」
「いや、なぁに。――まるで死出の旅路に赴く者を見送るかのような辛気臭さだと思ってな」
らしくないぞ、何時もの小生意気さは何処へやった。
自分の沈んだ面持ちを見詰め、そう揶揄する黒猫を帽子の影から睨んだ。
人の気も知らないで。
「……鳴海さんに、なんて言えばいいんだ」
咄嗟に、彼の人を引き合いに出してしまった。しかし、そうまでして口にしかけた言葉とは異なる科白を放った筈なのに、自らの声音の中に隠し切れない感情が滲んでしまったことに歯噛みした。
途方に暮れた子供のような其れに気付かぬ筈も無い黒猫は、其の大きな耳をぴくりと動かし、只静かに笑っていた。大方、自分が本当に問いたかったことも察しているのだろう。
「――何も」
しかし黒猫は態と少年の問いに乗る。

「何も言う必要はない。あれでいて、そういったことに関しては誰よりも大人びている男だ。お前如きがあれこれ気を遣わずとも、全てを察するだろうよ」
随分と目をかけてやっていた彼のことを、そんな一言で片付けた黒猫は、次いで天高く聳え立つロケットを静かに見上げた。
それにしても。
「――お前も随分と人間らしくなったなぁ」
「突然何を言い出すかと思った。随分な言い草じゃないか」
真剣だった雰囲気に水を差されたように感じ、憮然とした口調で抗議した。しかし黒猫はそうは言うがなと言葉を続けた。
「初めて目通りした時のお前ときたら」
忌々しげに目を細める。
「帝都を守護する上で肝要となるだろう人の心の機微は勿論だが、自身の其れですら疎くあったことに加えて、ただ里の教えのみを盲信して、他所に目を向けようともしない有様だったじゃないか」
尤も、其の姿は葛葉やカラスの連中が望んだ通りのものであったやもしれんがな。
舌打ち混じりに其処まで口にしたところで、黒猫は突然ふふふと笑い出した。其の珍しい姿に目を見張る。
「それがこうまで変わるとは。いやはやいやはや、……まこと恋とは凄まじきもの」
……手遅れにならんうちに引き離すべきかとも思ったこともあったが。

其の言葉に思わず身を乗り出すが、黒猫は其れを遮る形であっさりと、しかし止めた、と口にした。
自らそう述べた通り、豊かな経験を誇る黒猫は、恐らく当の本人である自分より先に此の感情について察していたのだろう程度のことは、薄々とではあるが気付いていた。しかし何の沙汰も無かったので、てっきりそういった関連のことには口出しする主義ではないのだろうと思い込んでいたのに。
渦巻く疑問を面に浮かべれば、黒猫は其れを横目でちらりと眺め、答えを口にした。
「……そうだな。害より実りの方が大きかったのもあるし、何よりお前みたいな小僧には、あれくらいの男で無いと釣り合いが取れんだろうと感じたから、かな」
いろんな意味で。
意味あり気に付け足された黒猫の言葉に首を捻りつつ、気になる言葉に反応した。
「釣り合いって、……能力的なことか」
地下造船所で確定された彼の前身と其の実力を連想してそう述べれば、目付けは何だか微妙な顔つきになってまぁそれもあるかな、と曖昧に呟いた。
思わせ振りな其の科白に何なんだ一体、と思いつつも、ふとあることに気付いた。
「……一寸待て。ゴウト、お前あの人のことを何時から気づいていた」
「顔を合わせた当初からだが」
何の気負いもなく、あっさりと黒猫は答えた。
「しかし『協力者』としての責務さえきちんと果たしてくれるなら、あやつが如何なる過去を持っていたところで、さして問題ではないし興味も無かったんだ」

あいつ、……『鳴海』は、本当にいい加減な男だったが。居住する場所や、帝都の裏情報といった必要最低限の事柄を提供するといった協力者としての義務だけは決して疎かにすることは無かった。
「そしてまた同時に、ヤタガラスと葛葉の境をも決して侵そうとしない男だったわけだが」
何を思い出したか。黒猫は可笑しそうに目を細め、髭を震わせた。
「……だが、あの時、あいつは己が判断で、其の境を踏み越えた」
「……」
命を縮めるかのような強行軍に身を任せ続ける自分を、彼が、初めて真剣に叱ってきた時の事を指しているのだろう其の科白に、自分もまた其の時に感じた驚きと、己が心に生じたこの想いの種を思い出し。何故だか妙に気恥ずかしくなり、無駄とは知りつつ学帽を引き下ろして顔を隠した。
「頑なに一線を守っていた筈のあの男が、一体何を思って其れを為したのか。全く与り知らぬ処ではあるが、帝都守護を任ずる『ライドウ』として生きていかねばならないお前にとって、其れは何よりも大事な教えとなったことは事実だ」
罪業を背負うこの身には、決して口には出来んものをあやつはお前に与えてくれたのだ。
静かにそう締め括った後、黒猫は一転して口調を変え、尤も、と前置きした。
「妙なところで抜けている男だ、」
何も考えずに口走ってしまった、という可能性も充分にあり得るが。
「しかし、少なくともあの一件は、俺があいつを懐に入れてやるに充分な出来事だったのさ」
「……だから、」

「そうとも。だから俺は、あやつのそういった面がもっと自然に表に出るよう、手を貸してやることに決めたんだ」
多少の猫扱いは、大目に見てな。
「……俺の、ためにか」
おずおずと確認する自分の問いに対して、黒猫は明確な答えを寄越さず。ただ、ふんと鼻先で小さく笑うに留めた。
温かな光を宿す其の翠の双眸を見詰め、思い返す。
思えば、互いに素直とは言い難い性分ゆえに、出会ってより今この時まで、小競り合いも言い争いも絶えることは無かったが。彼は、何時だって経験の足りない自分をこのような目で見詰めながら、さり気無い素振りで導いてくれたのではなかったか。
それっきり沈黙した自分の、何時に無い殊勝な態度に何を思ったのか。黒猫は得意げにぴんと髭を立て、口を開いた。
「どうだ、恐れ入ったか小僧」
そう言って笑う黒猫を拗ねた目で睨みつけると、更に愉快そうに笑われた。
目付けの狙い通りの結果になったとはいえ、一言の反論も無しというのは我慢ならないと口を開きかけたが、それより先に九十九博士の合図する声が響き渡ってしまった。
「む、そろそろ時間のようだ」
固まる自分を他所に、黒猫はひくりと髭を揺らめかせ、腰を上げた。

「ではな」
「……」
「そうそう、大事なことを言い忘れた」
如何なる返答を返したものか。逡巡する自分へ向けて、仲魔を従えた黒猫は嘯いた。
何やら厭な予感を抱きつつも眉を寄せ、其の言い忘れたこととやらを待つ。
「俺が戻ってくるまでの間にあの男に振られるようなことがあっても、泣くんじゃないぞ」
「……誰がっ、」
半ば本気で肩を怒らせる自分を声高に笑いながら、黒猫は仲魔と共にロケットに乗り込んだ。

駆動音が低く室内に木霊する。
宇宙まで届くにしても、果たして空気の方は大丈夫なのだろうかと密かに案じていたのだが、幸いにも密閉性には充分考慮した上で製作されていたようだった。しかし、最初の頃に比べて些か息苦しく感じる。猫の身体ですら此の有様なのだから、恐らく今のままでは人間が乗り込むには無理があるだろう。改めて、自ら乗り込もうとした小僧を押し留めて良かったと、胸を撫で下ろした。
ロケットを提供してくれた九十九博士には、色々と世話になった恩も含めてそういった類の助言も伝えてやりたく思ったが、関係者以外にとって自分はあくまでも只の猫だ。そんなことは不可能だろうし、若し何か知りたいことがあれば、これを飛ばす方法を探し出してきた小僧の方に問い合わせて

くることだろう。
小さい円形の窓から外を眺める。
天を破れば如何程身近に見えるのだろうと密かに楽しみに思っていたのだが、いざ実際こうして宇宙から見てみると、どの星も皆地上で目にした姿と左程違いが無いように思えた。例外といえるのは月と、つい今し方飛び立ってきた地球が見える、其の程度のことだった。
しかしまぁ、世の中こんなものだろう。
さして残念に思うことも無く其の事実を受け入れ、頭上に大きく輝く星を振り仰いだ。
窓辺に収まりきらないほど、巨大な青い星。其の中でも特に小さい島国の帝都という場所。其処に未だただ一人で立ち尽くし、ロケットの軌道を目で追っているだろう小僧の姿を思い描く。
別れというものは苦手なので、先程は随分と素っ気無い態度を取ってしまった。しかし子供だと思っていた小僧も、そんな自分に合わせて感情を堪えることを覚えてきたようで、正直助かった。
其処まで思ったところで、大事なことを伝え忘れたことに気が付いた。
――サマナーとしての成長の証を目にすることは勿論だが、小僧のそういった人間的な成長の兆しを目に出来たことが、自分は何よりも嬉しかったのだ。
失敗ったかなと思わないでもないが、徒人ならまだしも小僧もまた『ライドウ』を名乗る者。其の機会が永久に失われたということには決してならないのだから、構わないだろう。
衛星を破壊すれば此の器は失われてしまうだろうし、其の際の衝撃如何では地上に戻るのに随分と手間取りそうだとは思うが、所詮はそれだけの話。魂の消失に至ることなど、あり得なかった。自分

が戻る其の時まで、小僧の補佐は、恐らくあの男がしてくれることだろう。良くも悪くも、人間というものを理解できている男だ。サマナーとしての素質は十二分に持ってはいても、人間としての其れには些か欠けるきらいのある小僧には、其れで充分な筈。

地下造船所で再会してから戻ってきた時の、それまでとは見違えるほどに芯の通ったものとなっていた其の眼差しを思い浮かべる。

自分に随分と懐いていたあの男も、確りと地に足をつけて生きる術を見出せたようだし、心配は無用のことだろう。ただ、寂しい思いはさせてしまうことになるが、其れもまた止むを得まい。

其処まで冷静に考えたところで、とある懸念が脳裏を過ぎった。

――間を取り持ってやっていた自分が居なくなったら、あの二人は一体どうなるのだろう。

今となってはすっかり有耶無耶になっているものの、此の一件が起こる直前には随分とややこしいことになっていたことを思い出す。

小僧の想いに僅かな打算でも感じられれば恐らくあの男のことだ、巧く逃げおおせていたのだろうが、生憎とそうではなく。受け入れるつもりが毛頭無いのであれば、小僧本人が想いの対象を変える其の時まで、気付かない振りをして流し続けるしか手は無いだろう。

しかし、あの小僧のしつこさといったら。

繰り返し繰り返し草を差し出してきた、あのしつこさを思い返すにつれて背筋は曲がり、髭も垂れ下がっていく。

あの男は其れに延々と付き合わされる訳だから、そりゃあもう大変なんてものじゃないだろう。

考えただけでも胃に穴が空きそうな男の労苦を思いやり、同情を込めた溜息を吐いた。
あの二人がどのような関係に収まるか。最終決定権は男にあると自分はみるが、しかし其れが何時になるかは小僧次第といったところだろうか。何にせよ、落ち着くべきところに落ち着くだろう。
むむ。……しかしそうなったらそうなったで、あいつらは巧くやれるのだろうか。
其の前歴を考えれば、男の方に経験があるのは間違いない。いろはは勿論、自らの身体に関する殆どのことも熟知しているだろうが、問題はそういった経験にめっきり乏しい小僧の方だ。
以前、何処ぞの通りで小僧と交わした会話を思い出す。
里で鍛え上げた精神で以ってある程度は抑えが利くだろう。しかし其れが懸想相手の行為に対してどれ程まで効果があるのか、読み切れないのが辛いところだ。小僧の行動如何によっては、あの男が重傷を負ってしまう惧れがあった。
素行に関しては色々と問題があったが、自分に対してだけは子供のような顔を見せて懐いてきた男だ。若しそのようなことになってしまっては些かどころで無く気の毒に思うし、何より小僧もまた随分と落ち込んでしまうのではなかろうか。
と其処まで考えたところで、はたと我に返った。ぷるぷると頭を振る。
莫迦莫迦しい。何だってそんなことまで心配してやらねばならんのだ。
肩に力を入れ、毛を逆立てる。
そもそも、あの二人が手がかかりすぎるのがいかんのだ。お陰で俺が要らぬ気苦労を背負い込む羽目になる。

ついついそんなことにまで気を回してしまう自らの人の好さには目を瞑り、腹立たしげな溜息を吐いて目の前の問題に頭を切り替えた。小窓の向こうに目を凝らすと、当初は遠く遥かに見えていた衛星タイイツの、特徴的な龍の文様が薄らと判別できるほどの距離まで近付いていた。

そろそろかと身を乗り出し、釦を押す頃合を見計らう。あと、数秒といったところだろう。

「正念場だ。――用意はいいな、」

背後で控える弟子の仲魔に一声かけ、地下造船所で負った傷が残る獣の前足で釦を押した。

「そうか……」

彼は、そう呟いたきり沈黙した。

言葉による下手な慰めなど何にもならないと思ったか。或いは、彼自身が衝撃を受けた所為で言葉が出てこないのか。何れにせよ、冷たいとも受け止められるだろう彼の何時にない素っ気無さが、今の自分にはひどく有難かった。

衛星タイイツの破壊に成功したとはいえ、事態は未だ解決へと至ってはいない。若し、失われた存在に嘆き悲しむことを許される時があるとすれば、其れは意味あり気な言葉を吐いてEL二〇〇を奪い去り、未だ行方の知れぬ大道寺家の令嬢を探し出し、無事連れ帰ることが叶った其の時しかないだろう。でなければ、今際の際に初めて、此の自分を『ライドウ』と呼んだあの黒猫に、恥ずかしくて顔向けなどできやしない。

そう思い、震えそうになる我が身を理性の力で必死に抑え込んでいた其の時。
静かな目で、自分の姿を注視していた彼は、ゆっくりと其の口を開いた。
「――夏月、」
びくり、と身体が震えた。
これまで幾度と無く大人気ない振る舞いや言動で、自分を怒らせたり揶揄ったりした。しかし其の実、彼は出会った当初に交わしたほんの少しの会話の合間で述べられた、『其の名で呼んで欲しくは無い』と言う自分の意志を重んじて、自分のことをずっと『ライドウ』の名で呼び続けてくれていた筈なのに。
……なのに。こんな時になって、初めて。其の名を。其の口で。そんな、――優しい声で。
自分が帰社した折には既に異変を察知していたのだろう。
自ら進んで席を立ち、何時ものデスク越しではなく自分の直ぐ傍らの位置をとって報告を聞いていた彼の、一見だらんと横に伸ばされているだけに見える両腕が、実は瞬時にも己の身体を支えられるよう、さり気無い緊張状態にあるのが其処で漸く見て取れた。
更に目を向ければ、入室していた折には咥えていた筈の煙草も、何時の間にやら其の薄い唇から消え失せている。
今だけは其の責務を忘れ、甘えてもいいのだと。
他でも無い彼自身から、無言で示された其の甘美な誘惑に、それまで必死で堪えていた何かが、決壊しそうになった。

しかし彼の胸に身を投げ出そうとした次の瞬間、自らの脳裏に全てを見透かしたような、冴え冴えと澄み渡った翠の双眸が浮かんだ。

――嗚呼、そうだ。ゴウトが俺に望んだことは。

曇っていた頭脳が瞬時に冴え渡る。

ふらついた足を建て直し、咄嗟に前へ差し出された彼の片腕を一時の支えとして体勢を整え直した。

背筋を伸ばし、学帽で顔を隠しながら閉じた瞼に力を込め、潤みかけた両眼から水分を振り払う。

そうして己が周囲に纏わりついた水の気配を完全に払い去ってから、自らの姿を注視し続けている彼と徐に視線を合わせ、何時もの素っ気無い口調を心がけて言葉を放った。

「……其の名で呼ばないでくださいと、以前はっきり申し上げた筈ですが」

どさくさに紛れて、何なさっているんです。呆けるには未だ未だ早いですよ。

つい先程まで全身に漂わせていた気弱な雰囲気が突然霧散したことに驚いたのか。彼は一時、其の長い睫に覆われた目をぱちぱちと瞬かせたが、しかし瞬時に事態を把握したのか、にやりと口の端を歪ませた。

「あらま、隙のないお坊ちゃんだこと」

しめた、と思ったのに。

「何期待してるんです、全くもう」

肩を竦めてぼやく彼に背を向けて、マントや道具一式を外すため歩を進める。社に戻っておきながら、装備を解くことすら忘れてしまうほど、自分は動揺しきっていたらしい。自身の未熟さにひっそ

りと苦笑した。
「――ライドウ、」
自分を、彼は銘で呼びかけた。
ブラシ片手にマントの埃を払っていた手を休め、行儀悪くデスクに腰掛けて新たに取り出した紙煙草に火を点けている彼の方へ向き直る。
「何でしょう、」
ふぅと一息、煙を吐き出して彼は続けた。
「今晩の夕食は、俺が作ってやるよ」
「……え、」
固まってしまった自分を見て、彼が不服そうに鼻を鳴らした。
「あによ、其の顔」
「え、だって、」
戸惑う自分を更に不満げな顔で見詰め、彼は煙の燻る煙草片手に反論した。
「……お前ね。これでも俺は、お前が帝都にやって来るまでの間、一人でちゃあんと暮らしていけていたんだけど」
何時だったか、魚の煮つけを作ってやったことだってあっただろう。
今となってはもう随分と昔のことのように思える出来事を指摘される。
「どれだけ人のことを駄目人間だと思ってンの」

そりゃ色々とやらかしたりはしたけどさぁ。其の反応って一寸酷くねェか。
彼の拗ねた科白に、嗚呼そういえばと思い至った。しかし同時に、彼の申し出に対し意外性を抑えきれず、戸惑った面を晒しているであろう自身の顔を学帽で隠しながら言葉を紡いだ。
「はぁ、其れは承知していますけれど。面倒だからと、ずっと外食で済ませていらっしゃったものだとばかり」
若しくは、ねえやを入れていたか。
内心そう付け足して陰陽葛葉とライトニングを置き、ベルトを外しながら答える自分の姿を彼は拗ねた目で見遣った。
「あのね、ライドウちゃん」
空いた方の手で髪を摘みながら、彼は子供に言い聞かせるように続けた。
「外食って結構飽きるもンよ。それに、ある程度は自分で作れないと、外国での長期滞在なんてホントやってらンねェんだから」
面倒なのは事実だが、かといって市井の御婦人をうちの奥に立ち入らせるのは抵抗あったしな。
そう締め括った彼の主張に、成る程一理あると納得した。正直、今日は何故だか普段に比べて酷く疲れていたので、彼の申し出は非常に有難くもあった。
いくら『ライドウ』とはいえ、此の程度の甘えなら許されるだろう。
そう思い、此処は素直に頭を下げておく。
「……それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

「ん、よしよし。……まぁお前さん程じゃないが、俺だってそこそこの腕前だと自負してるンでな。楽しみに待っててくれ」
そう言って嬉々として煙草の火を消し、腕まくりをしながらキッチンへと向かう彼の後姿を見詰める。
「――鳴海さん、」
「なーに。割烹着の在り処とかはちゃんと分かってるから。心配しなくて良いぞ」
いやそうじゃなくてと思いながら、其の言葉が嘘偽りで無いことを示すように迷いなく次から次へと目的のものを手にし、並べ始める彼の姿に驚き、言葉が途切れる。
自分が探偵社で探偵見習いとして働き始めてから此の方、珈琲を淹れる時以外ほぼ一度もひとりでキッチンに立つ事の無かった筈の彼が、あれこれと自分の使いやすい様に配置換えしていた調理器具等の在り処を完全に把握していたとは。
大したものだ、とひとしきり感心したところでふと思い出した。
……彼の前身を省みてみれば、左程不思議なことでも何でもないじゃないか。
すっかり騙されていた自身に内心苦笑しながら、つい先程疑問に思ったことを口にする。
「……それ程までに自信がおありなら、どうして普段は何も為さらないんです、」
どうやら自分が帰ってくる前に、ある程度の下拵えは済ませていたようだ。
この調子なら仕上がるまでそう時間はかからないだろう。そう思い、いそいそと調理に励むという彼の珍しい姿を、キッチンの扉に背を預け、腕を組んだ体勢で眺める。

臭みを取った魚を鍋に入れ、赤砂糖と醤油と味醂、そして生姜で味付けを施している彼の斜め前方にあるガス釜には、既に火が入っていた。なかなか手際が宜しい。
「どうしてって、そりゃお前」
他にやってくれる奴がいて、しかもそいつが自分より上手いってンだから。
「……何も態々俺がやらなくったっていいじゃないか」
手にした包丁を軽く振りながら平然と返された彼の回答に、少しだけ脱力した。
……成る程、そういう理屈か。
自分にはついていけそうにも無いが、確かにそういった考えもあるだろう。
――そして、ぐうたら探偵の出来上がりというわけだったんだな。
自分の呆れた視線に気付いたのか。彼が拗ねた顔で振り返った。
「何だよ、何かおかしなこと言ったか、」
「いいえ、全く」
何とも『らしい』ことだと思いながら学帽の鍔で目を隠しそう答えれば、彼は唇を軽く尖らせたまま、ふん、と鼻を鳴らした。
「なら何時までもそんなところに立ってないで、ソファーにでも座って休んでろ。出来たら呼んでやるから」
「……了解しました」
普段は全く何もしようとしない彼が、他ならぬ自分の為に手ずから料理をする、という姿をもう少

し見ていたかったのだが、指示を下されてしまっては仕方が無い。下手に抵抗して臍を曲げられても困るので肩を竦めて了承し、そそくさと社内へ戻った。彼が夕食の用意をする音を聞きながらさてどうするかと悩んだが、結局ソファーの上で何をするとも無しに、ただぼんやりとした時間を過ごした。

小一時間ほど経った頃、漸く呼ばれた声に応じキッチンへと向かう。卓上に用意された品々は、成る程結構な出来具合だった。

しかし、卓上に並んだ料理を目にした時、何故だか自分の中に違和感が生じた。

内心首を傾げるが、笑顔を浮かべて着席を促す彼を前に其れを默殺することを選んだ。そうして酒の肴に適したものが多い気がするのは愛嬌かな、と苦笑しながら、久方振りに口にする彼の手料理に舌鼓を打った。

――夕餉の終盤になり。先程感じた少々の違和感の原因が、煮魚の割り振られる量が何時もより多かったことにあると気付いた時。また切なくなってしまったのは、自分だけの秘密にしておこう。

就寝の挨拶を終えた少年が自室へと引き上げたのを戸口から見届け、振り返ってがらんとした社内を見渡せば、卓子、デスクの影、ソファーや本棚の上といった箇所を重点的に目線が泳いで行った。

二、三度そういった行為を無意識の内に繰り返したところで、其の意味するところと行為の無意味さに失笑がもれた。一体自分は何を、――『誰を』、探そうとしているのか。

全く莫迦莫迦しい。がしがしと頭を掻きながら社内の戸締りを済ませ、自室へと引き返した。

蛍光灯は点さず、ベッドサイドに置いてあるスタンドの明かりを最小限に引き絞る。薄暗い光の中、壁際の戸棚の奥を漁り、隠してあったとあるラベルのボトルを取り出した。

昔、洋行していた折に入手した秘蔵のマッカラン。

手にしたボトルをしげしげと見遣った後、思い切って封を開け、傍らに用意した専用の洋杯に注いだ。栓を閉めたボトルと、琥珀色の液体が泳ぐ洋杯をそれぞれ手に持ち、窓辺に設置された一人掛けのソファーに座り、微かに曇った硝子越しに何処とも無く外の景色をぼんやりと眺めながら、ちろりちろりと其れを舐めた。

自分を失わずに済んで安堵した直後にまさか、己が目付けを失う羽目になろうとは。あの少年には、ひどく堪えたことだろう。

身に纏う黒マントを土埃で汚したそのままの姿で、たった一人で帰ってきたのだろう其の、何時に無く憔悴した姿。

可哀相に。思い出すだけでも心が痛む。

此処へ来た当初から常に、まるで寄り添うように、支えるように自然と少年の傍らに控えていたあの黒猫は、少年にとって共に居るのが当然のような存在となっていたに違いない。

実質的に行動を共にし始めたのは少年が『ライドウ』を襲名して後からのようだったが、そういった感覚というものは、共に居た期間の長さのみに左右されるわけではないのだ。

何せ、意中の相手である自分の前では、何時だって、精一杯背伸びをしてみせるあの少年が。

深い溜息をついて洋杯の中身を舐めた。

……一瞬といえど、揺らいだのだ。
全く、無謀な行動をとった俺を叱ったくせに。肝心のあんたがそんな風に消えてどうするよ。
胸を刺す痛みに目を閉じて、居なくなった彼の姿を思い浮かべる。
自分と彼とは言葉が通じない分、少年と比べると面倒なことも多く、ちょっとした小競り合いも多かったが、仲自体は左程悪くなかったように思う。そして其れは、彼が自分に対して相当な譲歩をしてくれていた所為であることも薄々ではあるが判っていた。自分は、彼に甘えていたのだ。
其処まで考えたところで、彼に対して行った自らの所業を思い出し、苦笑が浮かんだ。
初めて会ったときにはあまりのかわいらしさに微笑んでしまった記憶がある。其の後もまた、中身がもういい年をした人間であることを承知している割には、折々目にする仕草にうっかり心を射抜かれ、ついついといった風に構い倒し。いよいよ痺れを切らした彼に爪を立てられて、痛い思いをしたものだ。
短気な奴だとぼやきながら引っ掻き傷を消毒し、拗ねていた自分に、自業自得だとばかりにそっぽを向いていた彼が、実はある程度猶予を設けた上でそういった罰を与えていたことに気付いたのは、何時の頃だったか。
少年に対する態度といい、自分に対する行動といい。全く彼は素直でなかった。
幸いというべきか、自分はある程度経験を重ね、また年も食っていた分、捻くれ者の彼との距離を巧い具合に調節していけたが、里を出るまで並ぶものとて無い程に年若い実力者であった少年には、あの黒猫は其のへそ曲がりっぷりも含めて、さぞかし厄介なお目付け役であったことだろう。

くぴり、と淫杯を傾け少量を口に含み、鼻腔を擽る芳醇なモルトの香りを楽しむ。
だが、少年自身は気付いていなかったのかもしれないが、そうやって遠慮なしの口喧嘩のできる相手を得るということは、実はひどく幸せなことなのだ。
想いを抱かれる以前も、またそれ以降も。自分に対しては常に控えめな言動を取る少年が、目付け役には遠慮の無い物言いをしているのを目にした時。自分が所詮部外者であることは十二分に弁えていたものの、矢張り感じてしまう疎外感を完全に払拭することは難しく。何気ない風を装って話しかけられるようになるまで、実は幾何かの時間を要していた。
しかしそんな事も彼はお見通しだったのだろう。後で少年からどんな目に遭わされるか承知の上で、それでも尚、そういうことがあった後には必ず自分の膝の上で寛いでくれていた。
少年が抱く想いに気付いてからというもの、必要以上の接触を頑なに禁じていた自分にとって、そういった折々に感じる彼のぬくもりは随分と心に沁みたものだった。
口中の液体を飲み下し、喉の焼け付く熱さで胸を焼く痛みを誤魔化す。
只でさえ小動物に死なれたりするのは好かないのに。其の上、弱った少年まで押し付けられるとは。
嗚呼全くやってられない。
――恨むぜゴウト。目付け役のあんた無しで、一体俺に何をどうしろってンだ。
そう恨み節を口にしたいところだが、実のところ彼が自分に対して何を望んでいたのか、それなりに察していることも事実だった。自分の足で立ち、前を見て進めということ。彼が望んでいたのは、ただそれだけの一言に尽きるのではないだろうか。

敵わねェよなと三度目の溜息を吐き、次いで微笑が口元に浮かんだ。
窓辺から目線を外し、空になった洋杯を卓子の上に置いた。
流石にこの時間から湯を使う気にはなれなかったので、寝る前にせめて身体だけでも拭き清めるかと思い、新しい下着とローブを片手に扉を開けた。静まり返った廊下を音も無く歩み、沈んだ気配の立ち込めている少年の部屋の前で暫し佇んで、緩く首を振った。
慰めてやりたいのは山々だが、特定の想いを向けられている今、其の行為はあまり得策では無いように思えた。下手に声をかけて何か事が起こるようであれば、双方共に決して良い結果を齎しはしないだろう。
年若い少年に、何も態々、過ちを仕掛けに行くこともない。
すまないなと内心密やかに謝りながら、そのまま素通りして浴室へと向かった。

ひとしきりさっぱりしたところで自室に戻り、ベッドに入った。
何だか無性に人肌が恋しくなったが、其れは恐らく今も一人きりで褥に横たわり、襲い掛かる孤独感に耐えているだろう少年もまた同じかと思うと慰めを求めて街に繰り出す気にもなれず。仕方無しに耐えることにした。
――昔の俺なら、迷わず女を買いに行ったんだろうけど。
浮かびかけた失笑が苦笑に切り替わる。

しかし今はもう、たとえ洒落でもそんなことを口走る気になれない。そんな自分が信じられず、とても奇妙でくすぐったかった。

全く、俺も変わっちまったもンだ。

幾つか在るクッションの内、手頃な大きさのひとつを抱え込む。

手触りと感触は比べ物にならないものの、収まる感じは程々といったところか。

だが背に腹は代えられない。ここいらで手を打っとくかと妥協して、僅かに痛む胸を抱えながら、ひとり眠りに就いた。

【了】

・マッカラン（The Macallan）…

芸術品とまで讃えられた銘酒。シェリーの中でもドライ・オロロソの樽しか使用しないという徹底した酒造りを行っていることでも知られる。一九六〇年代まではスペイサイドの外では手に入らず、希少価値もあって熱狂的なファンを生んだ。シングル・モルトを代表する最も著名な銘柄の一つ。

・ねえや…

年の若い女中や下女のこと。

・猫に九生あり…

猫が生来敏捷で狡智なため、他の動物よりもしぶとく生きのびると考えられることから、猫は容易に死なないという意味。